



ます。人々の営みから生まれてきた願いや知恵や信仰などが、その時代の織り手の生活をくぐりぬけて織り込まれていきます。魔よけや息災の願い、祖先や精霊（身近な動物など）に守られていることが描かれた布を身にまとった暮らしに、目に見えないものを感じ、大事にしている人たちの力を感じました。

さて、日本にも様々な行事があり、そのほとんどが魔よけとつながりがあり息災を願うものであるようです。子どもが無事に育ち、家族が息災であることが難しかった頃の人々の願いがこめられているのでしょう。丸い鏡餅にこめられた意味を知る時に、祖父母の家でお盆を過ごし迎え火・送り火を焚くことに、民俗資料館にある古いものと大差ないはた（織）の道具を使うことに、私はなんともいえないほっとするようなきもちを味わいます。受け継がれ伝えられてきた知恵や願い、自分もまたそこにつらなっているということを感じるからでしょうか。

七夕も古くから伝えられてきた行事であり、七夕に欠かせない竹は他の年中行事や神事にも度々使われ、魔よけの力があるとされてきたようです。短冊のついた笹飾りを軒下にも吊して魔よけにしたり、畑に立てて虫除けにしたところもあり、七夕は子どもの楽しみのためのものではなかったという話も本で読みました。七夕に限らず、ほんの何代か前まで伝わっていた意味が今ではほとんどわからず、ただの「お子様のお楽しみ」になってしまったり、商業ベースにのせられて歪んだ形で伝えられてしまうことは悲しいと思います。

す。

私の通う幼稚園でも御多分にもれず七夕の活動があり、大きな竹に飾りをつけます。包装紙を切った折り紙で作った飾りに混ざって、時々、広告紙で作った剣やら、広告から切り取ったヒーローや花の写真などもぶら下がっています。飾り―すてきなものの―（自分の）好きなもの・大事なものという連想が働くのでしょうか。私は普通の飾りとは一風変わったこれらの飾りも大好きです。

七月七日を過ぎ、笹を一枝ずつ持ち帰ったり、川に流す代わりに焼いたあと（細い枝だけ焼いていいところはとっておくのです）、これからが楽しどころです。思わず腕まくりしてしまいます。日射しの強くなるこの季節、竹で作った水鉄砲は人気物です。梅雨の晴れ間を縫っての水あそびでは、水をたっぷり入れたバケツと水鉄砲を持って追っつけて、立ち止まって水をしこんでからピューとかける子もいて、おなかをかかえて笑っているうちにかけられることもしばしば。輪切りにした竹に米やあずきを入れてマラカス、刻みを入れたり切り込みを入れたり、細く割った竹で楽器づくりも楽しみました。おじさんに竹馬も作ってもらいました。半分に割った竹での青竹踏みは疲れた足にはこたえられませんでした。竹とんぼになったり、朝顔や野菜の支柱になったり、生活の様々な道具にもなり、幼稚園では竹細工は難しいけれど、日本の竹の文化をこの竹三昧の日々に思います。

七夕といえは織姫と彦星の話、星もつきもの。二十数年生きてきた私も今までに一度位

はプラネタリウムを見たことがあるのですが、記憶には残っていません。それよりも、旅先、キャンプで見た満天の星が圧倒的に強い印象を残しています。まっ暗な夜の闇の中で月の明は驚く程頼りになります。「月明だけじゃなく、星明というのもいいよ」という友人の話に、私も近いうちに星明も経験したいと思っています。星を見るのは好きなのですが、恥ずかしながら星座でわかるのはオリオン座くらいで星の名に至っては片手にも足りないかもしれません。名前を知ることとそのものに近づけることもあるのだからと、星座の早見表も一応持っています。今のところただぼんやりと空を眺めるだけでも充分幸せです。子どもたちのいちばん初めの星との出会いはプラネタリウムなどではなく、本物の闇の中の星であってほしいと思います。星の美しさと夜の暗さ、宇宙の広さ、この世の不思議を感じてほしい。では保育の中でどうぞと言われれば、星の夜には気のあった友人たちとお酒を酌み交す方がいいので、とお断りすると思いますが――。

最後に、最近身近で小さいお子さんを事故で亡くされた方があり、私自身やりきれない思いでいっぱいでした。それがひとりの子の言葉で少し楽になりました。

「年寄りには死んだら星になるけれど、○○ちゃんはおかわいかったから天使になるんだよ。天使になると天使の幼稚園に行けるから、きつとお空で楽しくしているよ。」

空を見て人は――子どもも大人も――いろいろなことを思います。

(大和郷幼稚園)